

Title	香川景樹と猪飼敬所
Author(s)	宗政, 五十緒
Citation	語文. 1960, 23, p. 22-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68543">https://hdl.handle.net/11094/68543</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 香川景樹と猪飼敬所

## 宗政五十緒

### 目次

- 一、敬所と景樹との師弟関係について
- 二、景樹が敬所から継承したもの

### 附説

- 一、景樹の香川家養子入りの時期について
- 二、「尚志齋 従学姓名録」について

### 一

香川景樹が猪飼敬所<sup>①</sup>と親交のあったことは、次の資料から知ることができぬ。

- ① 『香川景樹モ王陽明ノ説が歌字ニ合候故頗信シ候、学菴通辨<sup>②</sup>ヲ見セ候所其非ヲ悟リ候、(「猪飼敬所書東集」村山氏ニ答フ、『日本芸林叢書』四卷一ページ)<sup>③</sup>
- ② 『尚志齋 従学姓名録』(猪飼敬所の門人帖)に左のごとく載っている。<sup>④</sup>

(寛政七年)<sup>⑤</sup>  
乙卯五月

山本近江守<sup>⑥</sup>

陸奥介養子  
香川 式部  
後任 長門介

又、傍証としては次のような資料がある。

③ 景樹が門人に説くところを、敬所が引いている。

(敬所)

「家大人云、陸王の学は、禪家の所謂本来無一物より出づ、

是れ亦禅学耳、程朱陸王の学の別を不<sub>レ</sub>知者、無<sub>レ</sub>目者也、香川

景樹其門人に教へて云、古今集を面白しと思ふ人は、必ず新古

今集は不<sub>二</sub>面白<sub>一</sub>はず也、其古今集、新古今集共に面白しと思ふ

人は、必ず歌を不<sub>レ</sub>知者也と、今王学を尤と思ふ人は、必ず宋

学は尤と思ふまじ、宋学を悦ぶ人は、必ず王学は不<sub>レ</sub>悦はず也、

宋王併て尤と思ふ人は、必ず程朱王陽明の別を不<sub>レ</sub>知也、(「於

多満幾」巻四——敬所の伝を、その子彦續が記したもの——『

史籍雜纂』第三、三九五ページ)

④ 景樹の養父、香川景柄が、寛政十一年に、敬所を訪問している。

(「猪飼敬所」来訪学者(名簿)<sup>⑦</sup>)に左のごとく見える。

(寛政十一年)

「己未

香川陸奥介」

資料②は、景樹が敬所と単に親交があったということのみならず、そこに師弟関係を認めねばならないであろう。すなわち、寛政七年五月、景樹二十八歳の夏、山本近江守正臣の紹介で、猪飼敬所

に彼は入門したのである。

しかし、当時の儒学の塾にあって、贅を執ったということは、必ずしもそこに、その師に就いて学んだということを認めはしない。ただ執贄のみで、他の儒者のもとへ奔るといったことも屢々あった。一例を挙げると、尾藤二洲の場合がそれである。

〔尾藤先生、学問始めの時分、皆川淇園が片山北海の二人の中に從学せんとて、皆川の家に至れば、門人を左右に列し、威儀を正して、逢ひたり、片山の家にいたれば、門前に手拭をかぶり、薪を割て居たる男ありしが、即ち北海也、終に從て学ぶ、秋山是を酔竹にきく、〕（『厩齋問話』、『日本芸林叢書』五卷一五、ページ）

景樹の場合は、それとは異り、敬所に学を受けたであろうことは、資料①によって略々推測しうるのであろう。そして、資料③④がその推測を補強するであろう。

## 二の(1)

前章引用①によって我々は、更に次のことがいえるであろう。すなわち、景樹が自分の和歌観を理論づけるにあたって、その依倚するところを陽明学から朱子学へと展回させていった過程に、敬所の助言があった、ということである。景樹の歌論に朱子学的な記述を発見しようとするれば、彼の『桂園漫筆』において、次のような記述にゆきあたる。

④「明々徳を体とす、孝弟忠信を用とす、是大学を入徳の門として、論孟次之所、以也」(『桂園遺稿』下、三〇二、ページ)

ここには「大学」重視の記述がある。朱子学に通じる点として認めることができるであろう。又、

⑤「其ことわりと申すは、思慮分別を申し侍る也、天理などいふことわりにはあらず、天理は即ち調にはべり、」(『随所師説』或人の詠草に、『香川景樹翁全集』下、八一ページ)

「天理は即ち調」という記述に、「理」を重視する朱子学の影響が窺われる。

しかし、だからといって景樹の歌論に、朱子学的な記述を屢々発見することは困難である。景樹の和歌観を知るに最も多くの資料を提供するであろう『桂園遺文』や『随所師説』などに対する時、そこに朱子学的な論述を屢見するには困難をおぼえる。

とすると、景樹が彼の和歌観を理論づけるにあたって、朱子学以外の理論をも借りたのではないか、という疑問が起ってくるであろう。すでに、宇佐美喜三八氏の御論考があって、氏は景樹の歌論に伊藤仁斎の古義学が反映していることを述べられた。ここで景樹の歌論と古義学との関係を私が述べることは、すでに無用の業であろう。

以上のことから、景樹の和歌観は、朱子学と古義学との両者によって理論づけられたのではないか、ということが一応考えられる。複数の異った理論を利用した理論づけは、当時流行の折衷学的方法といつてよいであろう。そして、折衷学的方法であると考えるならば、景樹が敬所から師承するに誠に恰好な学問であった、といわねばならない。敬所は自らもいうように折衷学者であった。彼は遺言にいう、

「嗚乎、余不才無能、唯能読書、折中古今、無偏執、辨妄糾繆、不仮借、知我罪我、世已有其人、猶俟後君子」(門人吉田寛書の碑文に記されている。「於多滿幾」所掲、三八九ページ)

そして、景樹の方法を折衷学的と考えるならば、彼の「調」と「誠」の理論において、更に陽明学的方法をも我々はそこに発見することができる。すなわち、景樹は、

「歌は唯実情をのぶるのみ」(「桂園遺文」 秋元公英が尋にこたふる文、『日本歌学大系』八卷二三八ページ)

「歌は只誠突のかをりばかりに候」(「随所師説」 大西吉邦が詠草に、『香川景樹翁全集』下、三九ページ)

といい、「実」(実情・誠実)を表現するものとして歌を把握する。そして、その「実」を彼は「調」という形式で表現しようとする。

「歌とは調の名にて候」(同、或人の詠草に、同、八二ページ) 又、

「いつはらず己が性情を述べんとする中に、調はひとりはらまるゝ也、」(同、水月法師が尋にこたふ、同、二四ページ)

そして、その形式にいかにして「実」を表現させるかといえは、景樹は「誠」を通じてそれを行おうとするのである。

「誠をのきて調をいうのは、木によりて魚なるべし、」(同、同、同、二四ページ)

「誠はうるはしく上品なるもの也、誠を述べんと思はゞ、上品によむ事也、しかよまんとするを、しらぶると申す也、」(同、ある法師の詠草に、同、四六ページ)

ここから、  
「調は誠のみ」(同、或る古文者の難問に答へられし文、同、七六ページ)

と誠調の一致が説かれる。

この景樹の説く誠調一致の説に対して、陽明学の知行合一説を考

えてみると、景樹の「誠」に対して、陽明学の「知」、前者の「調」に対して後者の「行」という関係で同一の構造が認められるのではあるまいか。

「知是行的主意、行是知的工夫、知是行之始、行是知之成、若会得時、只説二箇知二己自有三行在、只説二箇行二己自有三知在」(『王陽明先生文鈔』「伝習録上」「徐愛録」)

「知之真切篤实处、即是行、行之明觉精察处、即是知、知行工夫、本不可離」(同「同、書」「答顧東橋論知行格致之学書」)

すなわち、「知は理想なり、行は実現なり」・「知は理論なり、行は實際なり」と陽明の知行合一説を説く(高瀬武次郎著『陽明学新論』九一ページ)ように、陽明学における、知行の不離、そして「

行」が人間の外面性を示すのに対する「知」の内面的性格、は景樹における誠調の不離、そして「調」が外面形式を示すに対して「誠」が内容としての性格を示しているという、両者の構造に同一性がある。又、更に遡れば、景樹の「実」に、陽明学の「理」が対する

であろう。

とするならば、ここに朱子学・古義学・陽明学の三者(外にもあるかも知れないが、近世日本の儒学においては、この三者と古文辞学が主流を占めていたことは周知の通りである。そして管見の範囲では古文辞学の影響を景樹において具体的に把握しえなかった)を

折衷して景樹は和歌観を理論づけたのではないかと考えられる。

しかし、前掲引用①のように、景樹が「学部通辨」を敬所に示されて、陽明学の非をさとった、ということになると、右の三者の理論を、彼が和歌観の成長につれて三変させたのではないか、ということも考えられそうである。又、この三変説とからんで、三変説・

折衷説の混合説も一応考えて見ねばならないであろう。

三変説を支える根拠としては、次の諸点が見出される。

まず、陽明学と朱子学との関係は既に述べたように、陽明学から朱子学へ、という展開の証がとらえられる。次に朱子学は、

④「こは歌学はかりには侍らじ、おほけなけれど、程朱の性理、象陽の良知の類ひも、此微塵の境よりあやまられしならんには、数にもあらぬわなみ、かたみに我を捨て、心をひそむべき限に候べし。」〔随聞随記〕天保八年四月江戸社中点取、『桂園遺稿』下、二六六ページ

に看られるように、程朱の性理説に対する否定的態度がみとめられる。

⑤「孔孟の性に就く時は、天理即ち道にして活、程朱の性に依る時は、天理即ち理にして死。」<sup>⑤</sup>

という。更に、景樹が、朱子学的な「理」を述べている言辞には殆んどゆきあたらない。

これらのことより、彼が朱子学から去って更に次の理論へ移ったという展開が推察できる。とすれば、朱子学の次に古義学が景樹にとり入れられたのではないか、ということがネガチヴに推測できる。そして、景樹の歌論における古義学の反映は、すでに宇佐美氏の御論考のように指摘できる。とするならば、景樹の和歌観は、その理論づけに当って、儒学についていえば、陽明学——朱子学——古義学、と依倚するところの理論を三変させたと考えられるのではなからうか。

右の結論が肯定されたとしてもしかし、折衷説は全面的に否定されるとは限らないであろう。というのは、この時代の思想に主流的

な位置を占めていたのは、折衷的思考方法であったからである。この主流的な思考方法を、その時代に生きた景樹が、全く拒否したと考えることは疑問があるであろう。私はむしろ、景樹の和歌観は折衷説と三変説との混合説、すなわち、景樹が前に理論づけに用いた陽明学や朱子学を全く拋棄して三変したというよりも、前のものを残しながら三変していったと考える方が、現存の資料を理解するに、理解しやすいのではないかと考える。しかし、『桂園遺文』・『随所師説』・『桂園漫筆』などの、景樹の歌論を窺いうる資料の一条の成立についての考証が審らかにない現在、その考証をぬきにしての立説は意味をもたないであろう。だから、混合説をここで断定的にいうことは私としては避けたいと思う。ただし、一歩退いて三変説の成立が、混合説の成立の以前に一応いいうるであらうことは右の論述で略々首肯しうるのではなからうか。

## 二の(2)

以上のように考えると、敬所の景樹への助言(前掲引用①)は、資料としては、陽明学から朱子学への展開におけるものであって、古義学への展開におけるものではない、ということになる。とする、混合説であれ三変説であれ、景樹の歌論の完成した形においては、この資料では敬所は前史的な時点での役割しか果たしていないという、軽い意味のものとなる。しかし、作家に視点をおく場合は、敬所からの受学は景樹が彼の歌論を創造した過程において少なくとも一つの重要な跳躍板の意味はもつてであろう。

又、景樹と敬所との交渉は絳学を学んだのみで、僅かであると考えてはならないであろう。引用③は、僅かな資料で根拠としては十

分とはいえないが、後年に至るまで両者が交渉をもったであろうことが一応推測しうるものであろう。とすれば、景樹が古義学を彼の歌論の論理づけに用いたのも、敬所を通じて古義学を受取ったのではなかったか、ということが考えられる。

というのは、敬所は岩垣龍溪の門人であった。<sup>⑧</sup>龍溪の師の一人には宮崎筠圃がいた。このことより、古義堂から景樹へ、という古義学相承の一つの系が明るみに出てくる。

古義堂（伊藤東涯・蘭嶋）——宮崎筠圃——岩垣龍溪——猪飼敬所——香川景樹

もっとも、景樹は京都に住み、かつ、優れた才能をもつ歌論家であったから、古義学は敬所を通じてなくても——昔日の面影はないにしても、かつてはあれほど盛行した古義学であるから——、受取りうる可能性は十分にあるわけである。だが、初めは他から入ったとしても、景樹が経学の師とし、その晩年には京師屈指の経学者であった敬所であるから、景樹が古義学に関して敬所の説を聴くことは極めて常識的になって考えられることである。

なお、景樹の歌作の技術面においては、敬所からの師承を推測するのは困難であろう。というのは、敬所は、

「老拙ハ元來詩文ヲ不好、李杜ノ集スラ未ダ曾読候、」（猪飼敬所書東集）（谷氏ニ答フ、四ページ）

「余不才不能詩文」（同、三九ページ）

などといっているのであるから、敬所が詩・和歌の実作において景樹を導いていったなどということは、まず考えることはできないと思う。

以上、私は少しく常識性を用いて資料の不足を埋めて論述した。景樹に関しては、先人の並々なぬ努力もあって資料は博搜されてはいるが、その時代から考えて新資料が出現する可能性の大きい対象である。私の推論には断言をさけたいと思う。

## 註

①敬所は、姓猪飼、名彦博、字希文、宝曆十一年京都に生る。大橋自門・手嶋堵庵に心学を学び、宮鳳岡に詩を、薩埵藥川に史を学ぶ。二十二歳にして儒者を志し、岩垣龍溪に入門、三十一歳より京都にて儒学教授す。天保九年津に移り、弘化二年同地に没す。年八十五。折衷学者。老証の書がある。（伝記についての詳細は「於多満幾」参者。）

②明の陳建の著。十二卷。学菴の義は正学を覆暖するの意、朱陸の異同について討究。その自序に「専ら一案を明にして以て三部を挾す、前編は朱陸早同晚異の实を明にし、後編は象山陽儒陰釈の实を明にし、聖賢の正学妄に議すべからざるの实を以て終ふ」とある。（以上、『支那学芸大辞彙』より要約）朱陸の説についての考証である。なお、同書を読んで貝原益軒も朱子学に帰依したということが、『先哲叢談』巻四に見える。

③以下、敬所の書状はこの翻刻を用いる。ページ数は同書にしたがう。

④京都大学附属図書館蔵。附説参者。

⑤引用部分は一筆で書かれている。

⑥入門月日を示す。附説参看。

⑦山本近江守は『地下家伝』二五巻の記載により、正臣と認められ

る。

「大炊御門家諸大夫」

山本 藤原

正臣 正興男

……

天明二年二月七日 任近江守

……

寛政十二年九月十七日 辞官返上位記四十七歳

『古典全集』本、一四一四ページ

なお、正臣は景樹の門人山本昌敷の父である。よって、景樹と山本家との関係は、既にこの頃からあり、後年の景樹と昌敷・嘉之との深い親交が単に師弟関係のみではないことを物語る。

⑧以下、「於多満幾」はこの翻刻を用いる。ページ数は同書にしたがう。

⑨京都大学附属図書館蔵。

⑩景樹の儒学の師については、彼が鳥取に居た時に堀杏庵に学んだとする推測（黒岩一郎氏著『香川景樹の研究』三八ページ、これは時山勇氏の説にもとづく旨記されている）以外には、管見の範囲では、述べたものを知らない。（ただし、「杏庵」が藤原惺窩の門人の堀杏庵とするならば、この説には疑問がある。）

⑪この「天理」は陽明学とも又とれぬことはない。前後の文章から調べても、朱子学か陽明学かは断言できない。

⑫黒岩一郎氏は前掲書二八一ページで「景樹が朱子の（）理気哲学の借用は一点の疑ふ余地もなからう。」（「景樹が」探りあてたものが宋儒の理気学説であつたらうと見た所で、此の学説が非常な

流行を見て居た当時としては、必ずしも的を失した想像でもなからう。」と述べていられるが、氏の掲出した資料や論証のみでは、首肯するに困難であると私には思われる。

⑬「景樹の歌論に関する一問題」（『国語と国文学』昭和三年二月号）。氏は、(一)「随聞随記」に見える程朱・陸王の批判、(二)桂園漫筆」に見られる、天地一元気説・天地の生々説・体用二分説批判、(三)「誠」と「忠信」の説、(四)「論語」重視、などをあげて述べていられる。

⑭引用は宇佐美氏前掲論文による。「折々草」の一本にある由。

⑮「水を求めんには溪に下るべし、月を見んには嶺に上るべし、聖賢の未言語といへども其筋にだに差はずば何をか憚らん、宋学の科目を論議にあてゝ深考するに、水を求めて嶺に攀ぢ月を見んとして溪に入こゝちせるは猶己が惑なりや未辨、因て姑く古学先生に従ふのみ」（『桂園漫筆』下『桂園遺稿』下三〇〇ページ）という記述は、「論孟」には古義学をあてはめて考えるのがよい、という考えで、必ずしも朱子学を否定しているとは限らない。これなどは折衷学的な態度の例であらう。

⑯敬所は自分の学は独学で発明したといっている（「猪飼彦繼隨筆」）が、敬所は龍溪の家に一年余り寄寓して学を受けている。又、龍溪も、「門人唯猪飼敬所一人に有る而已」と人に答えたという（「於多満幾」）から、龍溪——敬所、の学統は認めねばなるまい、⑰「先生（龍溪）は東涯門人宮常之進（宮崎筠圃）の門人也」又、続けて「伊藤を宗と為るに非れども古註を用ゆ、家大人（敬所）是より古学に志す、初め宋儒の説を見て深く其道理を曉り、今仁斉の説を読玉ふに及んで、発明する所少からず」（「於多満幾」）

とある。

筠圃が義堂の門人であることは諸書に見える。今、中村幸彦氏「宮崎筠圃と古義堂」(『神田博士遺曆記念書誌学論集』所収)による。

⑮「二十年前松本愚山衆中ニテ云、京師ノ儒者余ヲ始メ皆虚名、唯猪飼一人実学ナリト、大田錦城モ云、京儒只猪飼一人、餘ハ小児ナリト、老拙コレヲ語ルハ自負ニ似タレド実ニ然リ、……」(『猪飼敬所書東集』谷氏ニ答フ、三一ページ)

## 附 説

1 景樹の香川家入りの時期について

景樹が香川家に養子入りした時期については諸説がある。

①寛政八年(二九歳) 説―井上通泰氏・山本嘉将氏・黒岩一郎氏

②寛政九年(三〇歳) 説―窪田空穂氏・山本嘉将氏

③寛政十年(三一歳) 説―実方清氏

(詳細は、黒岩一郎氏『香川景樹の研究』七八ページを参看。)

諸説の上限は、寛政八年、景樹二十九歳である。しかし、すでに本論に掲げた「從学姓名録」によれば、景樹の敬所入門時期である寛政七年に、景樹はすでに、香川式部と記されている。この資料に基づけば、景樹の香川家入りの年の下限は、この寛政七年、景樹二十八歳とせねばならないのではなからうか。

しかし、それを断定するには、この「姓名録」は、いささか資料価値が低いといわねばならない。というのは、「姓名録」は、敬所自筆と推定しうるが、入門者がその費を執った時期に、敬所が記載したのではなく、後日とりまとめて記載したものと認められるので

ある。少なくとも、寛政三年より文化四年までは一筆で書かれたものと認められる(ただし、死亡・住所変更などには追筆がある)。按ずるに、文化四年に敬所が移居した際に手控えのごときものから整理したのであろうか。そして何よりも、香川式部については、その肩書に「陸奥介養子」と記されていることによっても、それが景樹の陸奥介任官時期の寛政八年十二月以後の記載であることは容易に判明するところである。

このことから、一応、景樹の入門が、或いは九年比であり、敬所が「姓名録」に整理して記載した折に誤ったのではないか、という疑問も起る可能性がある。

(なお、景樹の、「姓名録」の記載が、はじめ景樹のものとの姓名奥村純徳とあって、敬所が整理の際に現在見るような記載に改めたのではないか、という疑問も一応起るが、これは「姓名録」の他の部分の記載から否定される。

〔例〕

①(寛政四年)

五月 禁裏附与力

村田 録之丞

(追筆カ)  
〔名諱言〕

(寛政五年)  
癸丑五月致仕石川源次郎と改名六月物故

②(寛政十二年)

八月 富小路押小路下町

笹井教馬

水 谷 勝 蔵

後改木村右門

すなわち、改名した場合には、元の姓名を記し、改名を傍記し



ているのである。)

以上、この「姓名録」を通じて、景樹の香川家養子入りの時期について述べたが、同記録を根拠として、養子入りの時期の下限を寛政七年と断言するつもりはない。ただ、もし今後、養子入りの時期を寛政七年以前とする他の証拠のあらわれたとき、同記録は傍証として役立つであろうと思う。

## 2 「尚志齋 従学姓名録」について

本論において、敬所の「従学姓名録」にふれたので、同記録について、気づいた点を参考に記しておく。

### ①書志略記

冊数、一冊。

表紙、「従学姓名録 尚志齋」とある。京都大学附属図書館にて後補した推定張紙に「猪飼氏旧蔵書 第九十三冊」とある。寸法、横四五cm、堅一六cm、奉書二つ折りの横長である。

### ②内容

猪飼敬所の門人について、姓名・住所・紹介者・入門年月日を記している。(記載年月を入門時期と推定するのは、①門人の初掲が寛政卯六月であるが、これは「於多満幾」の、寛政三年(三年)秋西陣にて敬所が開業したという記載と殆んど一致すること、②記載人名と紙背との関係——詳細は省略——による。)

すなわち、同記録は「於多満幾」と照し合わせて見ると、猪飼敬所が寛政三年西陣に帷を下してより弘化元年(没前一年)に至る、

彼の一生の間の門人帳といふべきものであることが知れる。同記録によると敬所は五十三年間に約六百五十人の門人をもったことが知られる。ただし、「於多満幾」に見える、広橋大納言・四辻中納言・日野南洞公などの公家の記載は見えない。しかし、鷹司右大臣・鷹司准后・転法輪中納言・鷹司大納言・五条などの公家は記載されている(詳細省略)。

同記録に載る門人の注目すべき者を三・四次に掲げる。

### ①(寛政九年)

(入門時期) (紹介者) 志摩答志郡的矢村  
五月 同上(飯塚元葛) 北 太学

(北条太学、霞亭である。霞亭が敬所に入門したことは森鷗外著『北条霞亭』には見えない。)

### ②(文化十二年)

四月廿九日 赤坐敬藏 若狭小浜東本願寺末  
妙玄寺 義門

(国語学者。義門が敬所と交渉のあったことは、碧雲楼寿筵全集 姓名(「於多満幾」巻四、所掲)に載っているとから窺いうる。)

### ③(天保元年)

八月十五日 (竹屋町下ルカ) 高倉  
(画人・儒者。) 中林 竹洞

### ④(天保七年)

十月廿二日 斎藤五郎 日向欲肥家中  
(昌平黉教官、安井息軒である。) 安井 仲平